

寒がりジャンパーの一番熱い日

大岡俊彦

スポーツ、人間ドラマ 120分

【あらすじ】

スキージャンプの台は、下を向いている。そう言うとき多くの人は驚くだろう。滑ってきて、勝手にカタパルトのように飛ぶ。それはスキージャンプではない。スキージャンプとは、放っておけば下に落ちるジャンプ台から、高く、遠くに飛ぶ競技なのだ。

上に飛ぶ意志のある者だけが上に飛ぶ。それは人生に、とても似ている。

将来を期待されたジャンパー青山大吾は、W杯札幌大会で横風に煽られ落下。そのトラウマで引退していた。

そこに東京からフリー記者の千佳がやってくる。彼女は目下「北海道の闇」事件を追っていて、誰もが注目するブログをつくりそこで発表したいと。それこそ「青山大吾復活ブログ」。自分の調べた「方法」なら必ず復活できる、もう一度飛ぶつもりはないかと。

離婚し、自暴自棄になっていた青山は、公園の滑り台から飛び、彼女と組むことになる。

その「方法」とは、「はじまりの日」からやること。青山はソリでジャンプした土手から徐々に飛び、ついに競技台を克服する。

トレーナー久我原を加え、夏の長野大会へ出る青山。だが強い横風に煽られ、トラウマが復活。下向きのジャンプ台から下向きに落ちてしまう。

横風こそ恐怖の正体と知り、それを克服するトレーニングを続ける青山。ある日の吹雪に千佳が巻き込まれ、助けに行った時、彼女のためなら横風を受け続けても構わないと本心に気づいた青山は、恐怖が消失した。

ついに因縁のW杯札幌大倉山で、青山はかつてのライバル火野と相まみえ、勝利する。同時に闇の真相がブログで発表され、二人の仕事は終わった。

「人生は一度失敗したら、失敗？」と千佳は聞いた。「まだ、つづきがある」と、青山は答える。

【登場人物】

青山 大吾（あおやま・だいご 32）

あおぞら牛乳所属の元ジャンパー。
かつて大事故を起こし、今はあおぞらスイミングスクールで働いている。

泉 千佳（いずみ・ちか 29）

ローカル新聞の元記者。
「北海道の闇」事件を追っていて、
青山に取引をもちかける。

火野 翔（ひの・しょう 32）

あおぞら牛乳所属のエースジャンパーで、ワールドカップ一位。
かつての青山のライバルで、赤いジヤンプスーツの目立ちたがり。
青山の妻、薫と不倫している。

岡崎 薫（おかざき・かおる 32）

青山の妻で、離婚寸前。
学生時代、青山、火野と三角関係だった。

春馬（はるま 7）

青山、薫の息子。

谷口（たにぐち 32）

千佳の先輩記者。「北海道の闇」を追って行方不明。

三上（みかみ 50）

あおぞらスイミングスクール部長。

久我原 毅（くがはら・たけし 40）

青山の盟友でコーチ。
沖縄在住、色黒のスキンヘッド。

○6年前、大倉山ジャンプ競技場

白い雪。

スキージャンプ台の踏切り部分。

青山NA「スキージャンプの台は下を向いている。そう言うと驚く人は多い。勝手に滑ってきて、勝手に上向きのジャンプ台で飛んでいくと多くの人は誤解している。そうではない。何もしなければ、ただ滑ってただ下に落ちるだけだ。スキージャンプとは、上に向かって飛ぶ意志のある奴だけが飛ぶ競技である」

そのジャンプ台（俯角11度）から飛ぶ、赤いジャンプスーツの火野（26）。

T 「6年前、大倉山ジャンプ競技場 F

ISワールドカップ札幌大倉山」

火野、着地してガッツポーズ。

アナウンサー「日本のエース、あおぞら牛乳所属の火野、K点を超えてきました！ 現在一位です！」

次のジャンパーは、青いジャンプスーツの青山大吾（26）。

青山 「……さぶ……」

身震いしながらゴーグルをつける。

アナウンサー「同じくあおぞら牛乳の青山、ワールドカップの決勝で同門対決！ これで勝った方が日本の一位です。静かにアプローチ……サツツ……ああっ？」

青山の主観映像。

迫るジャンプ台。

眼下に広がる札幌市。

勢いよくジャンプ。

急に、吹き流しが横風を受ける。

主観映像は空中で回転する。

コーチボックスの久我原（34）。

久我原「大吾！」

火野 「青山！」

青山、ランディングバーンに叩きつけられる。白い雪煙。転がる。

アナウンサー「転倒！ 青山転倒！ 横風に

煽られたか、空中で姿勢を崩して……!!」

人形のように滑って来る青山の体。

受け止めようとする係員。

外れたスキー板が遅れて滑ってきて、それを避ける。

青山NA「落ちる奴は勝手に落ちる。上に飛ぶ意志のある奴だけが飛べる。人生と同じように」

意識を失った青山。

騒然とする会場。

白い雪。

○現在、雪の札幌市

T 「現在、札幌市」

○あおぞらスイミングスクール、内

デッキブラシでプールサイドを掃除している青山(32)。スイミングスクールのTシャツを着ている。

お年寄りばかりのスイミング教室。

壁の防水TVで、今季のジャンプのニュースが流れている。

キャスター「今週のゲストは、日本ジャンプ界の絶対エース、現在世界2位の、火野翔選手にお越し頂きました！」

笑顔で手を振る火野(32)。

拍手するTVの中の観客。

拍手をするプールのお年寄りたち。

キャスター「アメリカ、レイクプラシッドの第13Rを経て、いよいよ第14Rの我らが札幌です！ 北欧を転戦するスキージャンプワールドカップ、札幌の前後三週間だけ、里帰りですね！」

火野「久しぶりに札幌ラーメン食べに行きましたよ！」

拍手する会場。

キャスター「札幌で狙うのは？」

火野「もちろん一位。いや、山を超えて観

客席まで飛んでいきます！」
キヤスター「いったんCMです！」

火野が道民保険のCMに出ている。
太い脚のアップ。ジャンプする。

『山を越えろ！ 道民保険』

青山 「……」

デッキブラシの手が止まっていた。

バイトの監視員「青山さん……あの……」

青山 「あ、ごめん、続ける」

バイト「あ、そうじゃなくて、多分……お客
さんのアレが……浮いてて……」

と水面を指さす。

青山 「(しかめっ面に)ウソコ？」

(画面にウソコは映さない)

バイト「……(うなづく)」

青山 「あ。大丈夫、君はもう帰ってもいい
よ。あとは俺がやるから」

お年寄りたちが遠巻きに見ている。
網で掬った青山。

○青山の家、外観、夜

車が着いて、青山が降りて来る。

○同、リビング

妻の薫(32)と息子の春馬(7)が
TVを見ながら食事中。

青山 「……」

二人とも無言。青山は無言でテーブル
に座り、買ってきた弁当を食べる。

春馬がリモコンでチャンネルを変える。

スキージャンプ、火野の特集。

番組『札幌に向けて、火野の軌跡！』

アナウンサー「ビッグジャンプ！ 火

野一位！ 魅せました火野！」

薫、慌てて春馬からリモコンを奪い、

別のチャンネルに変える。

青山 「……」

会話のない食事。

○次の日、あおぞらスイミングスクール、外

貼り紙『プール掃除の為、本日休館』

青山 「……そうなら事前に連絡しろよな」
車に乗り込む青山。

○青山の車内、高級ホテル前

青山 「は？」

腕を組んでホテルから出てくる、薫と
火野を見てしまう。

楽しそうな薫の顔。
笑う火野。

青山 「なんだ。……お前ら、ヨリ戻したのか」

○青山の家、リビング、昼間

家に帰ると、春馬が青山のスキー板を
出して遊んでいる。

スキー板を道路に見立て、おもちゃの
車を走らせている。

青山 「今日はお母さんしばらく帰って来ないぞ。……それ、どこから出したんだよ」

春馬は開いている押し入れを見る。
もう一本のスキー板が放置されている。

春馬 「だってもう使わないんでしょ？」
青山 「……」

× × ×
回想。

まだ仲良かった頃の青山と薫夫婦。

薫はスキー板にワックスを塗っている。

薫 「もうこれ神棚に飾りましょうよ！」
青山 「飾ったら使えないだろ」

薫 「そっか！ でもこの板は大吾を乗せて遠くまで運んでくれる、大事な大事な我が家の守護神よね！」

薫 愛おしそうに、板を撫でる薫。
「……大吾あのね、私妊娠したの」

青山 「マジで？ え、マジで！」

× × ×
押し入れに残るスキー板を見る青山。

○朝、あおぞらスイミングスクール、駐車場

青山が車を降りると、千佳（29）が
仁王立ちで立っている。

パン！ とクラッカーを弾けさせる。

青山 「なに？ なに？」

千佳 「おめでとう青山大吾！ あなたは私
に取材されるチャンスを得ました！」

青山 「は？」

ICレコーダーを向ける千佳。

千佳 「ズバリもう一度、ジャンプする気は
ない？」

青山 「……」

青山無視して歩く。追いかける千佳。

千佳 「青山大吾32歳。名門あおぞら牛乳
スキー部に火野翔とともに所属。火野とは
小学校からの幼馴染みでライバル。日本の
将来を背負って立つ二人とまで言われたが、
6年前の落下事故で自信を失い、体が完治
しているにも関わらず……」

青山 「アンタ何者だ？」

千佳、名刺を出す。

千佳 「東京から来たフリーの記者、泉千佳
と申します。青山大吾の復活の記事を書き
たいの。再び飛ぶまでのお膳立てをするか
ら、独占記事を書かせて」

青山 「……（立ち止まる）」

千佳 「認知行動療法は試した？ 私の調べ
た方法なら、絶対飛べるようになる」

青山 「……もう辞めたんだよ」

スイミングスクールの扉を開ける青山。
千佳 「ジャンプ台は下を向いている」
足を止める青山。

千佳 「だから上に飛ぶ。あなたの言葉よ」

青山 「……」

千佳 「青山大吾復活ブログをつくります！

一年後の札幌ワールドカップが目標。きつとみんな注目する、大コンテントになる！」

青山 「……」

ドアを閉める。

○夜、同駐車場

帰りの青山。

車のワイパーに「泉千佳」の名刺がはさんである。スキージャンパーとジャンプ台の絵まで描いてある。

青山 「……」

○青山の車中、夜、高級ホテル前

再びホテルから、火野と薫が出てくるのを目撃。

ハイビームにしてクラクションを長く鳴らす青山。

二人、青山だと気づいて止まる。

青山、車から降りる。

薫、火野の腕を引いて逃げる。

○青山の家、リビング、夜

三人の食事は無言。

○あおぞらスイミングスクール、内

スタート台の上でジャンプの構えをしてみる青山。

ふ、と苦笑いして立ち上がる。

青山 「……」

だが再びジャンプの構えから腹打ちで飛び込む。何度も何度もやるので、バイトが止めに来る。

○夜、青山の家、リビング

帰宅する青山。

青山 「は？」

荷物がなくなって、もぬけの空。
ソファとTVしか残っていない。
その上には離婚届と手紙。

手紙 「出てゆきます。判子を押して下さい」

× × ×

台所の棚を探る青山。

出てきたのはカップ麺カレー。

青山 「よりによってカレーかよ」

回想。プールを網で掬う。

できあがった蓋を開けようとして、倒
してしまう。

床にぶちまけられるカレー。

青山 「あー！」

トイレからトイレトペーパーを持っ
てきて、床を拭く。

青山 「なんなんだよ。なんなんだよ俺の人
生……」

何もないリビング。床を拭く青山。

○大倉山ジャンプ台が見える公園

対峙する青山と千佳。

千佳 「青山大吾のジャンプは、日本国民に
希望を与えていたと思う」

青山 「希望？」

千佳 「火野翔のジャンプは力強く高いジャ
ンプ。一方あなたのジャンプは低く出る。
風に乗って、低く、どこまでも遠くに。可
能性があったのはあなたの方。いつか大逆
転するジャンプだから」

青山 「いつか、ね」

スポーツ新聞数紙を雪の上に投げる。

『火野、札幌でV』

『W杯世界王者、火野誕生！』

『フィンランド、ポーランドの残り5
Rを待たず年間優勝を決める』

青山 「アイツと俺、今や天と地の差だ。復
活して、どうやって一年で戦えるようにな
る！ そんなの出来る訳ないだろ！」

千佳 「体は回復してるのよね？」
青山 「してるさ！」
千佳 「じゃあ心の問題ね？」
青山 「思えばなんでも叶うってか？ 何も知らないで！ 俺が努力しなかったとでも？ 体が動かねえんだよ！ 咄嗟に体が硬直するんだ！ 猫が車のヘッドライトに照らされて身動きできず、そのまま轢かれちまうようにさ！ 1ミリもジャンプできねえ！ 飛びたくたって飛べねえんだよ！ 薬も電気も催眠もやった！ 俺はもう落ちてくだけなんだ！ 下向きのジャンプ台から下向きに！」
背景の、大倉山ジャンプ台。
千佳 『はじまりの日』からやるの」
青山 「は？」
千佳 「最初からあんな所から飛ばないでしよう？ あなたが飛べると思った、はじまりの場所、はじまりの日からやり直すの。小学生の時だった？ もっと小さい時？」
青山 「……」
千佳 「あんな怖い所から飛ぶなんて正気の沙汰じゃないわよ。でもそれが楽しいってインプットされてるから飛べるんでしょ？ その『はじまり』からもう一度やる」
青山 「……小学校二年生。土手で、赤いソリに乗ってた」
千佳 「じゃあそこからね！」
青山 「……」
千佳 千佳、公園の滑り台に上る。
千佳 「私実は、崖っぷちななの」
青山 「？」
千佳 「フリーのジャーナリストって言ったって、まだ一円も稼いでいない無職」
青山 「？」
千佳 「新聞社に勤めていたとき、ある事件を先輩が追っていて、デスクから取材を止められたの。弊社の親会社グループのスキヤンダルだから、ってね。先輩は辞表を叩きつけて北海道に飛んだまま行方不明。私

もあとを追って新聞社を辞めた。……その親会社の名とは、あおぞら牛乳」

青山 「……それで俺に付きまとうのか」

千佳 「青山大吾復活ブログをみんなが見て、ピークに達したとき、その北海道の闇のスcoop記事をアップする」

千佳は滑り台の上で構える。

千佳 「貯金は全額崩した、東京のアパートも引き払った。ここで何もできなきや私の人生おしまい。このままするずる落ちるか、飛ぶかの瀬戸際」

青山 「……」

千佳 「ねえ。人生は、一度失敗したら、失敗？」

千佳、滑り台をジャンプ台に見立てて、直滑降してジャンプして、砂場に着地。

青山 「……」

青山、滑り台に上り、構える。

青山 「あんたの言うリハビリが、効くならな」

スーッと下まで滑って来るが、一番下でいったん止まる。

青山 「……」

力強く、踏み切って飛ぶ。

千佳、駆け寄って握手。

千佳 「契約成立！」

背景にたたずむ、滑り台よりはるかに巨大な大倉山ジャンプ台。

○雪一面の土手

車から赤いソリを出す青山。

スキー板を出し、履く千佳。

青山 「なにやってんの」

千佳 「せっかく北海道来たんだし、スキー覚えなきやって思っ！ ジャンパーの気持ちはちよつとでも知りたいし！」

だがぎこちない。

青山 「やったことあんの？」

千佳 「……ない……ッ！」

派手に転ぶ。

千佳 「なんなのこれ！ 滑る！」

青山 「そりゃ滑るためのものだし」

千佳 「……」

青山 「？」

千佳 「転んでも笑わないのね」

青山 「スキーで転ぶやつは笑わないよ。俺もそうだったんだから」

千佳 「？」

青山、手を差し伸べる。つかまり、起きる千佳。

青山 「俺、神奈川からの転校生だったのね」

赤いソリを見せて。

青山 「周りの子はみんなスキーを生まれた時からやってるけど、俺だけ出来ねえから溶け込めなくて、一人でソリで遊んでたんだ。で、ただ滑るだけだと飽きるから、ジャンプ台つくって飛んだら、体が熱くなつてさ」

千佳、慌ててスマホで録音。

千佳 「体が熱くなる？」

青山 「俺北海道も雪も嫌いなんだよ。寒いし、冷たいし。寒がりなんだよ元々。でもその時だけ熱くなって、だから何度も何度も飛んだんだ。友達が出来なかったこととか、冷たい雪とか、関係なくなるから」

土手に上ってゆく青山。

青山 「あ、それアルペンスキーだろ。初心者はノルディックスキーがいいぞ」

千佳 「？」

ソリに乗る青山。

青山 「これでいいの？」

千佳 「そう！ 『はじめ』からやるの！」

青山の主観カメラ。

まずは土手をソリで降りるだけ。それをカメラで撮る千佳。

千佳 「これは怖くない？」

青山 「怖くない」

千佳 「熱い？」

青山 「全然」

青山、ソリを降りて足で雪を掻き、ジャンプ台をつくりはじめ。

青山 「最初は、こんなもんだったかなあ」

千佳 「やってみましょう！」

青山の主観カメラ。

ソリで降りる。ジャンプ台で尻がふわっと浮く感覚。

着地で転ぶ。

青山 「うわっ！」

千佳 「大丈夫？」

駆け寄ろうとする千佳、スキー板で転ぶ。

千佳 「ははは……転んじゃった！」

青山 「ははは。ははは」

千佳 「さっき笑わないうって言った癖に！」

青山 「違うよ。熱いんだ」

千佳 「え？」

青山 「熱いんだ。あの時みたいだ」

走って土手を登る。

ソリで降りてきて、ジャンプして転ぶ。

青山 「ははは……ははは！」

もう一度。もう一度。最後は着地が決まる。

千佳、雪まみれのまま、シャッターを何度も切る。

息が切れた青山。顔が紅潮している。

青山 「それで……」

千佳 「それで？」

青山 「アイツが声をかけてくれたんだ」

千佳 「アイツ？」

青山 「火野さ」

× × ×
回想。

ソリで遊んでいる少年時代の青山（10）に、赤い帽子とネックウオーマーの火野（10）が声をかけて来る。

火野はスキーを履いている。

火野 「君転校生だろ？ 何でスキーやんな

いの？」

青山 「出来ないから」

火野 「ノルディックスキーなら生活でも使えるし、覚えるに越したことないよ」

青山 「ノルディック……スキー？」

火野 「カカトが浮くんだけ」

ビンディングからカカトが浮く様を見せる。

火野 「アルペンだとカカトを固定しちゃうから、初心者は逆にやりにくいんだよね。

ノルディックは生活用のスキーだから誰でもできるよ？」

青山 「そうなの？」

火野 「(土手のジャンプ台を見て) スキージャンプって知ってる？ あれ、ノルディックスキーの競技なんだぜ」

青山 「……」

火野 「スキー部入りだよ。友達増えると、俺もうれしい！」

青山 「……」

× × ×

青山 「それからジャンプ始めて、あいつとライバルと言われるまでになつて、一緒にあおぞら牛乳のスキー部に就職して、オリンピックチームにも入つて……」

手のひらを裏返して、落下させる。

青山 「……」

千佳 「……ノルディックスキーって売ってるの？」

青山 「中古なら一万円くらいかな。次は、小学生のジャンプ台だね」

千佳 「ええ」

○小学生用のジャンプ台、手稲山シャンツェ

T 「手稲山シャンツェ ミニヒル(小学生4年生以下用) K8m級」

千佳 「うわ！ かわいい！ これが小学生用！」

小さな手作りのジャンプ台の写真を撮りまくる千佳。

小さなスキーを履いて飛ぶ小学生たち。

ノルディックスキーを履いている千佳。

青山 「買ったの？」

千佳 「中古。安かった」

一歩一歩進んでいく千佳。

青山、車からスキー板を出す。

× × ×

回想。

春馬 「これ使うの？」

× × ×

青山 「使うよ。……今」

ジャンプ台上る青山。

深呼吸。

カメラを構える千佳。

青山の主観カメラ。

小さなジャンプ台を滑り、少しだけ浮いて着地。

それをカメラに収める千佳。

滑ってくる青山。

千佳 「どう？」

青山 「うん。思い出して来たよ。この感覚が一瞬で終るのがつまらないって思ってたこともね」

小学生に混じって、大の大人が本気で飛ぶさま。それをカメラに収める千佳。

青山 「小学生の大会はいつもいつも火野がトップを取ってて、俺は毎回二位だった」

「けど四年の時、初めて一位を取ったんだ」

千佳 「えっ。さぞ熱くなったでしょ」

青山 「逆に冷えっ冷えだったよ」

千佳 「？」

青山 「その時は火野が風邪引いて休んだんだ。王者のいない大会で勝ったって嬉しくねえよな。でもそれ以降あいつは風邪を引かなくて、やっぱり二位。中学くらいじゃね？ 勝ったり負けたりの関係になったのは」

千佳 「……じゃあ、次は中学生のジャンプ台！」

○中学生用ジャンプ台、荒井山シャンツェ

T 「荒井山ジャンツェ スモールヒル
ヒルサイズ 27m」

主観カメラ。

ジャンプ台を滑り、浮いて、着地。

千佳 「ここまでが青山大吾中学三年生。次
は高校生用のジャンプ台？」

青山 「いや、高校の時はもう大人用のを飛
んでた」

千佳 「えっ。じゃあ」

青山 「宮の森ノーマルヒル」

千佳 「ガチの競技台じゃん！」

青山 「……今なら、行ける気がする」

○ウィークリーマンション、夜

ノートPCでブログを作っている千佳。
ブログ名は「ジャンプ台は下を向く」
だから上に飛ぶ」。

ソリの写真、小中学生のジャンプ台で
飛ぶ写真。

千佳 「……これを最初の記事にするには、
パンチが足りないよね……」

ジェラルミンのケースを開ける千佳。

ドローンが入っている。

千佳 「いよいよ、秘密兵器の出番か」

○青空にドローン飛ぶ

○宮の森ジャンプ競技場、スタート地点

T 「宮の森ジャンプ競技場ノーマルヒル
ヒルサイズ100m」

準備する青山。

ドローンをテスト飛行させる千佳。

千佳 「よし、これで行けそう！」

青山 「ホントに追いつけるの？」

千佳 「レース用のドローンなんで120キ
ロ出るの！ 追いつく追いつく！」

と、ドローンのモニタから目を離して

リアルなジャンプ台をのぞき込んだ千佳は足がすくむ。

青山 「あんまり見ないほうがいいよ。素人は吸い込まれる。一歩下がって」

両手で遮ってあげる。

千佳 「崖と同じってこと？」

一歩下がる。

青山、うなづく。

× × ×

回想。高校時代。

火野（16）、青山（16）、薫（1

6）は仲良しの三人だ。

高校の教室でだべる三人。

ジャンプ台の上まで、火野と青山が薫を連れていった日。

薫 「（のぞき込んで）目がくらむ！」

火野 「素人は吸い込まれるぞ」

青山 「（両手で遮って）崖と同じだな」

だが薫の視線は火野を見ていることに、

青山は気づく。

× × ×

青山、構える。

千佳、ドローンを構える。

青山 「何もかも、後ろに置いていく」

スタートバーからアプローチに入る。

以下ドローンカメラの映像。

直滑降。加速。吸い込まれるように青山とともに落ちてゆく。

ジャンプ。青空が目痛い。

空中で時間が止まったかのように着地。

着地。

吠える青山。

千佳 「……やっぱいの撮れた」

青山、もう一度吠える。

○同、ジャンプ台の下、ブレーキエリア

今度はジャンプ台の下の方で、千佳が構えている。

ジャンプ台の上の青山が合図。

合図する千佳。

ドローン、今度は青山より先行して青山の正面を捕らえながら撮影。

スタートから着地までわずか10秒、ジャンプの全体を1カットで撮ることに成功する。

駆け寄る千佳。スチルカメラのシャッターを切る。

千佳 「やったね！ やったね！」

青山 「うん……うん……」

手袋を脱ぎ、雪面に押し付ける。

青山 「こんなに、熱い」

その手を千佳の頬に押し付ける。

千佳 「……」

青山 「君のやり方は、正しかった」

千佳、動揺してスチルカメラを落とすてしまう。

千佳 「あー！」

慌てて拾う千佳。しかし電源が入らなくなつた。

千佳 「あー……あー……どうしよう！ 家賃もカツカツなのに！」

青山 「家賃？ っつてどこに住んでんの？」

千佳 「東京の部屋引き払ってきたので、今はウィークリーマンションにいながら家探しして……」

青山 「……丁度空っぽだし。ウチ住めば？」

千佳 「は？」

○青山の家、リビング

何もない家を見渡す千佳。

千佳 「ほんとに何もないんだ」

青山 「俺はここで寝るから、二階は自由に使っちゃいいよ。そしたら家賃いらないだろ。いちいち連絡取り合わなくていいし」

○二階の元子供部屋

見渡して。

同じく何もない部屋。
千佳 「……まずはベッド買いに行くか」

○夜、実景

○夜、千佳の部屋

新品のベッドの上に座り、そこでノートPCを広げ、今日の動画を再生している。

ブログの記事を書き始める千佳。

開いたままのドアをノックする青山。

千佳 「どうぞ。ていうかこれ見てよ！ ヤ

バイでしょこれ！」

ドローンの映像を見せる千佳。

ブログのタイトルを見る青山。

青山 「『ジャンプ台は下を向いている』」

千佳 「『だから上に飛ぶ』。あなたのインタ

ビューからいただきました。ていうか、これは万バズ行くでしょ！」

その映像を見る青山。

青山 「タイミングが早い。まだビビってる」

千佳 「？」

青山 「ジャンプのベストタイミングは、足が伸び切った瞬間、台から足一個分はみ出した時だ。遅いと力を伝えきれない。早いとまだ残ってるのに飛んじやう」

千佳 「足一つ分……ってこんだけ？（手で示す）」

青山 「再生して、自分のタイミングで飛んでみ？」

主観映像を再生する。まるでゲームみたいだ。

千佳 「……ハッ！（と体を伸ばす）」

青山 「そこじゃ遅い。もう一回」

もう一度再生。

青山 「ハッ！」

千佳 「ハッ！」

微妙にずれる二人。

千佳 「……その差で変わる？」

青山 「トップクラスではな」
千佳 「……ちよつと待って？ トップスピ
ードって90キロは出るんでしょ？ 足一
個って25センチとして……」
ノートPCで計算。
千佳 「足一個のズレって、100分の1秒
ずれたらダメってこと？」
もう一度再生する。
青山 「ハッ！」
千佳 「ハッ！」
ずれる。もう一回。
千佳 「ハッ！」
青山 「ハッ！」
千佳 「これでもダメ？ 難しすぎる！」
もう一回。
二人同時に「ハッ！」
青山 「おっ。いいじゃん」
千佳 「隣見ながらやった」
青山 「カンニングかよ（笑）」
千佳 「……ねえ、こんなことしてるとど
んな気持ち？ 熱いの？ ずっとカッカし
てるの？」
青山 「……（首をかしげて）逆だな。とて
も冷静で、水の中にいるみたいな感覚」
千佳 「？」
青山 「この競技は何に似てるか？ って、考
えたことはある。走り幅跳び、水泳の飛込
み。でも俺の中では立ち幅跳びだな。とて
も静かなところから最大を出す」
千佳 「静かなスポーツ」
青山 「俺の中ではね。水の中でじつとして、
突然飛び出すイメージだな」
イメージ。水の中で構える青山。
千佳 「……（深呼吸して動画再生）」
二人同時に「ハッ！」
二人、ハイタッチ。
青山 「あ、めし食いに行く？ って来たんだ
った」
千佳 「あ、えー、お誘いはうれしいですが、
そういうのはお断りします」

青山 「？」

千佳 「男女が一つ屋根の下にいるわけですし、お互い大人とはいえ、間違っちゃいけませんので。私たちはあくまでビジネスパートナーです。あ、お風呂とかものぞかないで下さいね。洗濯も別々で」

青山 「あ、……はい」

青山 出ていく。

千佳、深呼吸して、自分の高揚した気持ちをなだめるので精一杯。

○新千歳空港に着く飛行機

T 「春」

南国風の服を着た、陽気な色黒スキンヘッドの久我原(40)が降りて来る。

○同、到着ゲート

出迎える青山、千佳。

青山 「久我原ア！」

久我原 「大吾ア！」

肘同士ハイタッチして殴り合う真似。

青山 「また、頼めるか」

久我原 「フン。火野を越えるんだろうな？」

青山 「当然」

久我原 「良く言った！」

二人、固い握手。

久我原、千佳に気づき。

久我原 「あ、新しいコレ(小指)？」

千佳 「違います。ビジネスパートナーです」

久我原 「えっ、……あっ、ビジネス的な、金銭での男女関係的な」

千佳 「ちがいます」

青山 「東京から来た記者さんだ。俺の復活

記事を書く」

久我原 「あー、そういうビジネス」

青山 「ちなみに、コーチ料は払えねえぞ」

久我原 「ボランティアでいいよ。支度金は沖縄で貯めてきた」

三人は歩き出す。

千佳 「沖繩？」

久我原「沖繩に移住して、海の家やっています。嫁を説得するのに大変だったよ！（笑う）」

こっそりと青山に。

久我原「ヤツたのか？」

青山 「やってねえよ！」

○居酒屋

にて乾杯する三人。

久我原「久我原毅、泉千佳、青山大吾、この3人のチーム大吾ということぞ！」

久我原、豪快に飲む。

青山の取り皿に取られた、少ない量を見て。

久我原「……マジで復活するつもりなんだな」

青山 「今日からじゃないよ」

久我原「……ずっと？」

青山 「あの日からずっと」

食べ始める。

千佳 「？」

久我原「ジャンプってのはね、体が軽い方が有利なのよ。競馬のジョッキーとかボートレーサーとかと同じ」

千佳 「丸の内OLのランチじゃん」

久我原「大吾、今BMIいくつ？」

青山 「18」

千佳 「モデル並みかよ！」

久我原「脱いだらすごいぜ、こいつ」

青山 「あほか。……ちよっとトイレ」

席を立つ青山。

久我原「……（千佳に）俺もおおぞら牛乳所属の、元ジャンパーだったのね」

千佳 「そうなんですか」

久我原「でも大吾と火野が入社して来やがってさ。勝てる訳ねえじゃんコイツらにって思っ、引退してバックアップに回ったのさ」

千佳 「それでコーチに」

久我原「ジャンプってのは競技人口300人
いないんだ。周りを支える人、審判やジャ
ンプ台を整備する人、駐車場の警備員すら
元ジャンパーってことあるぜ」

千佳「……そんなもんなんですか」

久我原「スキージャンプを支える人たちは、
みんなエースに席を譲った人だ。誰もが自
分より飛んで欲しいと願っている。アイツ、
俺に何てメール寄こしたと思う？」

千佳「？」

久我原『つづきがしたい』、だつてさ。そ
んな事言われたら、嫁と子供置いて飛んで
来ざるを得ねえよ。アイツの続きは、俺の
続きでもあるんだ」

千佳「……」

戻ってきた青山。

青山「？」

久我原「やっぱ君たち、ヤツた？」

千佳「やってません」

○川沿いの土手

走る青山と久我原。

スクワット。ジャンプスクワット。

写真を撮り続ける千佳。

○体育館

エアマットを敷いて、ジャンプのフォ
ームで飛ぶ青山。下で支える久我原。

台車の上で構える青山。後ろから押す

久我原。

○あおぞらスイミングスクール、夜

一人でプールサイドからジャンプのフ
ォームで腹打ちし続ける青山。

水の中の無音。

水から顔を出す。荒い息。

○夜、千佳の部屋

冬のドローン映像をきっかけに、ブログ閲覧者が増えていく。
トレーニングの写真。

記事 「青山大吾、復活へ本格始動」

50PV、100PV、2000PV。

○草原の中の産廃場

車から降りる青島、千佳。

千佳はシャツターを切る。

牧場の中に空白地帯があり、被せた土の下に車など産廃物が見える。

青山 「見せたかったのは、これか」

千佳 「(うなづく) 高齢化によって、酪農の継ぎ手が減って廃業が増えるの。その土地を買い上げて、違法の産廃場にしてる奴らがいる。埋めてしまえば分らないってね。土地欲しさに、牛乳の質が悪いからと難癖をつけて廃業に追い込む、悪質なケースもあると聞く」

青山 「誰が？」

千佳 「あおぞら牛乳。北海道を代表する牛乳屋さんね」

穴に降りて、中も撮る。

千佳 「違法なものを捨てる。地下水に毒が流れる。下流に伝わり、この先は次第に牧草が生えなくなる」

青山 「ひでえな」

千佳 「一か所じゃないわ。北海道中がだんだんこうやって歯抜けになっていっている。直接あおぞら牛乳がやっている証拠はない。土地がらみだから、きな臭い連中が絡んでるかも」

青山 「それでも協力しろと？」

千佳 「社内でしか見れないデータをコピーするだけでいい。それと先輩の残したデータや私の調べたリストの重なりがあれば、そこを掘れる」

青山 「……」

緑豊かな牧草地帯。

千佳 「この大地を、二度と牧草の生えない場所にするつもり？」

○朝日三望台シャイツェ

T 「夏」

T 「朝日三望台シャイツェ ヒルサイズ4
5 m クラレ高梨沙羅杯サマージャンプ朝
日町」

緑の人工芝に、散水されている。

足元まで流れてくる水。

千佳 「そもそもサマージャンプって知らなかったし！ 水で摩擦を減らしてるんだ！」

写真を撮りまくる。

青山 「スモールヒルなんて小学生サイズだろ」

久我原 「公式試合の復帰第一戦だ。まずはここで勝て」

○同、スタート台の上

青山、スタートバーに。

コーチボックスにいる久我原。

下の観客席で、カメラを構える千佳。

深呼吸する千佳。

青山の呼吸。

二人の呼吸が一致してくる。

青山 「……」

イメージ。水の中で構えている。

ふと横を見ると千佳もいて、カメラを構えている。

青山の主観。アプローチ。ジャンプ。

千佳 「ハッ！」

フライト。伸びる。

ダン、と着地。

千佳 「来たーッ！」

スコアボードには「一位 青山」。

○名寄ピヤシリシヤンツェ

T 「名寄ピヤシリシヤンツェ ヒルサイ
ズ100m サンピラー国体記念サマージ
ヤンプ大会」

青山の主観カメラ。見事なジャンプ。

○ブログの画面

記事 「青山大吾、閃光の復活劇！」

記事 「クラレ高梨沙羅杯優勝！ サンピラ

ー国体記念優勝！」

写真が多数。PV3000。

○大倉山ジャンプ競技場

ランディングバーンの途中の、ある一
点まで歩いてくる青山。

そこに座り、人工芝を撫でる。

回想。落下して雪煙に包まれた青山。

その落下地点だ。

青山 「……帰ってきたぞ」

立ち上がり、そこからの眺めを見る。

T 「大倉山ジャンプ競技場 ヒルサイズ

137m 札幌市長杯」

千佳 「ぎゃー！」

ブレーキゾーンでは、グラススキーを

履いた千佳が転んでいる。

千佳 「水、滑る！」

青山、ランディングバーンから叫ぶ。

青山 「転んだことのないスキーヤーはいな

い！」

× × ×

主観カメラ。直滑降。

大ジャンプ、そして着地。

久我原 「もらったアー！」

青山に走り寄る久我原、千佳。

青山、スーツの半身を脱ぐ。

3人でハイタッチ。

千佳、久我原「あつつ！」

青山、笑う。

久我原「これで青山大吾完全復活！」

青山「いや……まだだ」

久我原「は？」

青山「まだ火野とやってねえ」

千佳「ハイハイハイ！ とっておき情報入手！」

久我原「何？」

千佳「現在火野はサマージャンプのワールドカップの為フランスからポーランドに移動中ですが、その次のロシアまで一か月空くため一旦帰国、長野白馬の大会にて調整予定！」

青山「じゃ……長野に行けばやれんのか。アイツと」

○ブログの画面

記事 「青山大吾サマージャンプ三連勝！」

記事 「長野白馬にて、火野と青山再戦！」

○あおぞらスイミングスクール内

デッキブラシで掃除している青山。

そこに三上（50）が声をかける。

三上 「青山くん、ちょっと」

○同、事務所

タブレットに立ち上がった、千佳のブログ画面。青山優勝記事。

三上 「ウチはあおぞら牛乳の子会社の施設で、君は本社から出向という形で来てるんだ。だから本社のスキー部の、邪魔をしてほしくないんだよね」

青山 「……親会社から、やめさせろとでも言われたんですか？」

三上 「いや、そういう訳じゃないんだけど」

青山 「有給取ってスポーツをする範囲内な

ら、個人の自由ですよね？」

三上 「理屈の上ではそうだが、ほら、きみは元全日本の二番だったわけでしょ？ 万が一、一番と争うようなことになったら、迷惑がかかる」

青山 「迷惑？」

三上 「あおぞら牛乳はスキー部を縮小したし、きみが親会社のスキー部に戻ることは出来ないぞ」

青山 「知ってます。さつきから何を心配しているんですか？」

三上 「いや、正直、私は親会社から睨まれてたくないのさ」

青山 「……迷惑はかけませんよ。かけるくらいになったら、会社辞めます」

三上 「助かる。……あ、いや、上司は引き止めないといけないんだった」

青山 「……」

○同、事務所、夜

一人しかいない事務所。

ノートPCを開ける青山。

「あおぞら牛乳社内ネットワーク

ID／パスワード」のページ。

パスワードを打って入る。

取引記録フォルダへ。

アクセスしようとすると、警告が出る。

警告 「出向中の社員は制限されています。

本社社員のみ入れます」

青山 「……」

hino@aozora.co.jp と打ってみる。

「パスワード」の文字。

回想。あおぞら牛乳社内。

火野 「俺は好きな女の名前しかパスワードにしないよ？」

回想。ホテルから出てくる火野と薫。

「kaoru」と入れる。

「ログインします」と表示。

青山 「……」

いろいろなフォルダを開け、ローカルにコピーする。

○千佳の部屋、夜

原稿をタイプしながら読んでいる。

千佳 「青山大吾のジャンパー特性はフリーゲータータイプである。ジャンパーは大きく分けて二種類いる。パワージャンパーとフリーゲーターだ。足の力を使い、強く高く飛ぶのがパワージャンパー。低く飛び出し、空中制御を繰り返し、揚力を使って長い距離を飛ぶのがフリーゲーター。青山は後者だ。繊細な神経を必要とし、1ミリずれてもダメなコントロールを利かせ続ける。冷徹な判断力、全身の制御能力が必要で……」

青山、開いた扉をノックする。

千佳 「どうぞ」

青山 「詳しいな」

千佳 「こういう解説があると、ジャンプはより面白くなるでしょ」

青山 「会社のフォルダは、大体見た」

USBメモリを渡す。

千佳 「えっ」

青山 「あおぞら牛乳と取引した不動産屋の記録自体はなかったが、一応コピーした」

千佳 「ありがとう」

青山 「利用価値がなくて済まん」

千佳 「別に、あなたを利用しようって魂胆じゃないし」

青山 「でもまさか、ここまで来れるとは思わなかった。それには感謝してるよ」

千佳 「……珍しいわね。あなたが人に礼を言うなんて」

青山 「俺だってありがとくらい言うよ」

千佳 「最初のあなたは、人を怖がって遠ざけてる捨て猫みたいだったけど」

青山 「あなたはいつもはしゃいでる犬みたいだったけど？」

千佳 「ふふ」

青山 「……ふん」

○長野、白馬ジャンプ競技場

T 「白馬サマージャンプ大会 長野県白馬ジャンプ競技場 ヒルサイズ131m」

車から降りた三人。

久我原 「相変わらず白馬の空気は濃いな！」

千佳 「濃い？」

久我原 「緑が濃い！ そのせいか、揚力が北海道より出る感じがある！」

千佳 「日本でそんなに変わらないでしょ？」

久我原 「俺には分る。な？（青山に）」

青山 「変わらんよ」

ずっとこける久我原。

○同、控室

板をかついでやって来る青山。
皆、ざわつく。

ジャンパー「青山……」

ジャンパー「青山……」

青山の歩いてゆく先は、取り巻きに囲まれた火野。

火野 「青山！ 復帰したんだってな！」

取り巻きを割って青山の所へ走り、肩を叩く。

青山 「ああ」

火野 「どこまで戻った？」

青山 「お前と、勝負できるまで」

火野 「……相変わらず怖い顔してるな！

よし、楽しみになってきたぜ！ 調整のつもりだったけど、本気出しちゃうぞ！」

○同、予選

T 「予選」

赤いスーツの火野の力強いジャンプ。
力強く蹴り、高く飛ぶジャンプ。
暫定1位。

それを見る久我原、千佳。

千佳 「あれがパワージャンパーの飛行曲線かー」

久我原 「見方がもう素人じゃねえし」

千佳 「青山大吾は全然もつと低い」

青山の番。低くて遠く長く飛ぶ。

久我原 「よし、決勝進出はもらった！」

スコアボードには「12位青山大吾」。

○同、決勝

T 「決勝」

ジャンプ台の上の、決勝メンバー待機列。30位から順に飛んでいく。

そろそろ青山の番。

一番上にいる火野のそばを通り過ぎる時に。

青山 「またお前と闘える。それだけを励みにしてきた。子供の時にお前が誘ってくれたから、俺はここまで来れたんだ」

火野 「……？」

青山 「？」

火野 「そうだっけ？」

回想。ソリに乗る少年青山に、手を差し伸べた少年火野。

青山 「俺が土手でソリに一人で乗ってたなら、『スキーやりなよ』って」

火野 「(考える) ……あつたかなあ。多分そうした方が優しくてカッコ良く見えるから、俺そうしてただけじゃね？」

青山 「……」

火野 「まあいいや！ あつたことにしとこう！ はは！」

青山 「……」

青山、ジャンプ台に向かう。

火野 「青山」

青山、振り返る。

火野 「薫は、俺の方が昔から好きだったそうだけ」

青山 「……」

動揺を隠せないまま、ジャンプの番が来る。

スタートバーに構える青山。

コーチボックスの久我原も遠く見える。

下から見ている千佳。

イメージ。

水の中でカメラを構える千佳。

しかし青山がいない。

千佳はカメラから目を外し、現実の青山を見る。

青山

「……」

動悸が激しく、脂汗。風。

吹き流しが真横に強く流れる。

その横風を、青山はもろに受ける。

青山

「……！」

フラッシュバック。

大倉山の横風。空中で体勢を崩す。

雪煙を上げて落下。

青山

「あ……あ……」

さらに強くなる横風。歪む視界。

天地が逆になる。

ざわつく周囲。

久我原 「何やってんだ青山！ 10秒ルール！」

カウントダウン、4、3、2……

青山、顔面蒼白のままアプローチ。

横風、強く吹く。

青山

「あ……あ……」

膝を抱えて恐怖に丸まってしまふ。

下向きのジャンプ台から、ただ下向きにぽとりと落ちる。

千佳

「えっ」

火野

「……」

久我原 「あー……」

ジャンプ台に吹いていた横風が、ようやく千佳のところにもやって来る。

強風で髪を乱される千佳。

青山、膝を抱えたまま下まで滑ってくる。

強風の音だけが、ただ響く。

○青山の家、リビング

ソファーにただ寝て、天井を見ている
青山。

○昔のインタビュー映像

青山 「ジャンプ台は下を向いている。そう
言うとき普通の人は『え？ 上を向いてて、
その勢いで飛ぶんじゃないの？』って驚き
ます。そうじゃないんですよ……」

千佳のブログに心無いコメント。

コメント「下向きに飛んでて草」

コメント「口だけ番長」

コメント「期待外れです」

○ニュース

字幕 「スキージャンプの帝王、火野翔入籍」

字幕 「お相手は学生時代からの恋人」

その写真。火野と薫。

驚く千佳。

○青山の家、リビング

ノートPCをもって階段を駆け下りて
来る千佳。

千佳 「知ってた？ これ……」

ニュースを見せる。

青山 「知ってたよ」

千佳 「えっ？ えっ……元奥さんでしょ？」

青山 「もともと高校のときは、彼女は火野
と付き合ってた」

千佳 「嘘」

青山 「元鞘だな。それがこっちの離婚の原
因。息子が俺の子なのは確かだけど」

千佳 「(かける言葉がない) あ……あの……
……」

青山 「落ち込んでる暇はない。恐怖の原因は特定できたんだ」

千佳 「え？」

青山 「……風」

○札幌市内、電気屋

扇風機コーナーにいる青山と千佳。

千佳、扇風機に向かって。

千佳 「あー(変な声になる)。つまり、強烈な風が来たら、体がすぐむってこと？」

青山 「そう(変な声)」

千佳 「すくんでなくない？」

青山 「足りない」

強のボタンを押す。首をかしげる。

業務用のサーキュレーターを最強に。

千佳の帽子が飛ぶ。

青山 「……(店員に) これ5個下さい」

○青山の家、リビング

サーキュレーターを5個並べた。

千佳、スイッチオン。

その風の前に、恐る恐る立つ青山。

× × ×

フラッシュバック。横風。落ちる主観。

白馬の吹き流し。すくんだ自分。

× × ×

横を向く。

横風を受ける青山。

呼吸が荒くなってくる。

辛そうな顔を見てスイッチを切る千佳。

青山 「何やってんだ！ もっと！ もっと

風をくれ！」

再びオンに。

横風を受け続ける青山。

○夜、リビングでの食事

千佳 「前から思ってたんだけど」

青山 「何？」

千佳 「あんた、感情の起伏小さくない？
喜ぶならもっと派手にするだろうし、落ち
込むなら号泣したりするんじゃない？」

青山 「昔から言われる。鉄仮面とか、感情
読みにくいとか。だから元嫁ともうまくい
かなかったんじゃないか」

千佳 「……」

青山 「黒猫がさ」

千佳 「？」

青山 「昔、黒猫と白い犬を実家で飼ってて
さ。ある日犬が死んでね、黒猫は一度も鳴
きやしなくて、犬から離れない、とかもな
かった。ずっと居なくなつて、ふつと帰つ
てきたり。随分ドライなんだなあつて思つ
たんだよ。だけど」

千佳 「だけど？」

青山 「一週間何も食べなかった。病氣じゃ
ないかと心配して医者に診せたら、『分り
にくいけど、彼女なりの悲しみの表現だ』
と言われたのさ」

千佳 「……」

青山 「悲しんでない訳がないんだ。そうい
う悲しみ方もあつて、ただ外から見えない
だけで、本当は感情は爆発しているんだ」

千佳 「……」

思わず立ち上がって、彼を抱きしめる。

青山 「な、なに？」

千佳 「大丈夫。大丈夫だから！ 絶対克服
できる。風。たかが風でしょ？ 絶対なん
とかなる！」

急にわあわああと泣き出す。

青山 「……うん」

千佳 「(思わず抱きしめたことに気付き、
離れる) あ、じゃあ、そういうことで！
明日は私取材です」

二階へバタバタと上がっていく。

青山 「……」

千佳 「え？」

青山 「……ありがとう。代わりに泣いてく

れて」

千佳 「……」

うなづいて、二階へ。

○体育館

サーキュレーターや扇風機を沢山並べて、強風をつくる。

横風を受け続ける青山。

久我原 「どうなんだ！」

青山 「全然いける！」

久我原 「じゃあ次！」

○宮の森ジャンプ競技場

発電機をかける久我原。

ジャンプ台の上にサーキュレーターなどを持ち込んでいる。

青山 「これだよ！……これだよ！……」

目隠しをする青山。

畳を持ってきて、風を隠したり、いきなり突風をつくったりする久我原。

それに耐える青山。

○居酒屋

相変わらず青山の皿は少なめ。

久我原 「俺思っただけだよ」

青山 「なに」

久我原 「パワージャンパーに転向したらどうだ？」

青山 「は？」

久我原 「パワーでドーンと飛ばばさ、高さが出て、風を利用せずとも飛べるだろ。低く

出て風に乗るお前のスタイル全否定になるけどさ」

青山 「……火野のスタイルを真似しろと？」

久我原 「まあ、結果的に」

青山 「……それは、俺のやりたかったことか？ 俺の続きか？」

久我原 「自分のスタイルに拘って、自分のやり方で勝利したいのか。それともただ勝ちたいのか。どっちがお前の『つづき』だ？」

青山 「……」

久我原 「もしあの事故がなかったとして」

青山 「……」

久我原 「もしあの事故がなかったら、お前はずっとそのスタイルで勝ち続けてたか？」

それとも別のやり方に進化したか？」

青山 「……」

○青山の家、リビング、夜

ソファに寝転ぶ青山。

帰って来る千佳。

青山 「おかえり」

千佳 「あの！」

青山 「？」

千佳 「私すごいアイデア思いついたんだけど！」

青山 「？」

千佳 「パワージャンパーになったら、風の影響受けにくくない？」

青山 「(思わず笑う)」

千佳 「？」

青山 「二人とも同じこと言うのかよ。久我原にも言われたわ」

千佳 「青山大吾のことは、私が一番考えてるし！」

青山 「事故らなかつた世界線の青山大吾は、……あつちの世界の俺は、フォーム改造に挑んだかな？」

千佳 「……青山大吾である限り、私はやると思う」

青山 「……」

千佳 「負けず嫌いだし」

青山 「……ふん」

○土手

ひたすらスクワットする青山。
正座した状態からジャンプして空気椅子になる練習。太ももが悲鳴を上げる。

○ジム

レッグカールを続ける青山。

滝のような汗。一回一回悲鳴を上げる。

久我原「チキンレッグって知ってるか！足の筋肉は腕に比べてつきにくい！だから楽勝な上半身だけやって下半身サボった奴は、鶏の足みたいに足だけヒョロガリなんだってさ！お前のやるべきことはその逆だ！競輪選手みたいになってみろよ！」

青山「あー！」

○土手

柱に低いロープを渡し、綱渡りで体幹のバランスを鍛える青山。

ヨガの斜めプランクの姿勢で足を延ばしたり畳んだりして、深層筋を鍛える。

○バーベルを担いでスクワットする青山

久我原「限界までやれ！限界までやれ！限界までやって無理ってなる所からもう十回やるんだよ！お前は阿呆か？火野に負けて下に落ちるだけの阿呆か？たかがそよ風にビビる阿呆か？それを越えろ！火野より太い足になって、火野より高く飛んで見せろよ！一！二！三！四！地味だぞ！地味だぞ！この地獄を抜ける！地味地獄を抜ける！まだ限界じゃねえ！まだ限界じゃねえ！」

青山「ああああああああ！」

○体育館

立ち高跳びをして、黒板にチョークの

粉をつける青山。
それは少しづつ伸びてゆく。

○とある不動産屋

で話を聞いている千佳。

千佳 「以上です。お話ありがとうございました」

ICレコーダーを止める。

不動産屋 「……あのさ」

千佳 「？」

不動産屋 「東京から来たんでしょ？ よそ者が、この件に首突っ込まないほうがいいと思うよ？」

千佳 「……どういうことですか？」

不動産屋 「あおぞら牛乳さんは、北海道一の企業さんだ。みんな何かしら関連して仕事をもらってる。つまり北海道全体があおぞらさんで持っているようなものだ。それが潰れたら？ 何とか持ちこたえている北海道が破綻するかも知れない。外国人が土地買ったりしてるしさ」

千佳 「……あおぞら牛乳に正義があると？」
不動産屋 「そうは言っていない。ただ、みんな嫌がるだろうなってことさ」

○路地裏

後ろから妙な連中に尾けられている。
突然、走り出す千佳。それに気づいて
追いかけてくる連中。
大通りに出た千佳。
人の目があることに気づき、睨む連中。
息を切らした千佳、人波に紛れる。

○走る青山の車の中

青山 「それで俺と一緒に行動だった？」

千佳 「しばらくはボディガード替わりに」

青山 「足がガクガクすぎて走れねえかもよ」

車線に割り込んできた車にクラクションを鳴らす。

青山 「ざけんなよ！」

千佳 「……最近、良く怒るようになった」

青山 「？ 久我原の練習がキツイからだろ」

千佳 「体を縮こませてる黒猫だったくせに、最近随分人に慣れて、感情を出してくるようになったと思う」

青山 「……犬野郎のせいだな」

千佳 「……ふふ」

と、千佳のスマホが鳴る。

千佳 「……警察？ (出る) はい……はい

……私です。泉です。……」

悪いニュースに、ぎゅっと目をつぶる。

青山 「……？」

千佳 「……分りました。確認、しに行きます……」

電話を切る。

体が震えている。

○とある漁港

網からピチピチの魚をあげている漁港。警察が待っている。

千佳が現れ、深々とお辞儀を。

○霊安室

遺体袋を開ける警察。(中は見せない)ハンカチで口元を覆いながら確認する千佳。悲痛な表情でうなづく。

千佳 「たしかに、谷口拓真さんです」

○その他の廊下

ファブリーズを千佳にかけてくれる刑事。

刑事 「なかなかニオイ、取れませんからね」

自分にもかけている。

刑事 「谷口さんは事故死ではないと我々は

考えます。釣りが好きだった訳でもないし、海水浴場があるわけでもなし、自殺か、あるいは。あの海は海流が速くて、沖のほうに流されやすくてね。地元なら知ってるでしょう。たまたま網にかかったのは、魚が豊漁で沖まで漁師が出たからですな」

千佳 「事故じゃなく事件だとして、誰が」
刑事 「まだ分かりません。谷口さんが北海道に来てからの足取りを丹念に追っています。たまたま後輩のあなたが札幌に来ていと聞いて」

千佳 「ありがとうございます。尊敬できる先輩に、せめて直接会えて良かったです」
刑事 「……何か、知りませんか」
千佳 「播磨山新聞社を辞めてからは、一度も連絡がなく、分りません」

刑事 「失礼ですが、北海道には」
千佳 「知り合いの取材に」
刑事 「ありがとうございます。こちらから聞きたいことがあれば、また連絡します」

○電車の中

向かいの席で、ずっと千佳を見ている男がいる。

○無人駅

で降りる千佳。
男も降りて来る。
発射ベルと同時に、ぎりぎりで電車に乗る千佳。
ドアが閉まり、男はホームに取り残される。

○別の駅、夕

車で迎えに来た青山。
安心した千佳、抱きついて思わずわあわあ泣いてしまう。

○夜、青山の車の中

千佳 「北海道に来たら、ひよっとして先輩に会えるかもなんて思ってた。私何やってんだろ。私何やってんだろ……」

両手で顔を覆う千佳。ぼろぼろと涙がこぼれてくる。

青山 「……」

背中を撫でてあげる青山。

青山の頬に涙がひとすじ伝う。

青山 「俺が、代わりに泣くよ」

千佳 「……」

暗闇の中を、車は進む。

○翌朝、千佳の部屋

目覚める千佳。

× × ×

回想。新聞社、夜遅く。

谷口(32)「千佳、俺の憧れの人を紹介したい！」

PCで青山大吾のジャンプ姿やインタビューを見せる。

谷口 「すげえんだよ青山大吾。『ジャンプ台は下を向いている。だから上に向かって飛ぶ』。すごいくない？」

千佳(22)「はあ」

谷口 「俺、世界で一番いいシャシンって、人が前に向かって歩く写真だと思うんだ。でもこの人、斜め上に向かってる。すごいよね」

千佳 「斜め上に向かってる」

谷口 「俺らブン屋はさ、見ることしかできないのね。政治家じゃないし、クリエイターでもない。見ること、書くことしかできないんだ。だからこそ、正しくものを見て、正しく書かなきゃいけないんだ。それが斜め上だけ？ 笑っちゃうよな」

千佳、谷口の笑顔につられて笑う。

千佳 「……」 × × ×

朝の来た世界を、眺めている。

○動物園、秋

T 「秋」

春馬 「もう少し、ライオン見ていい？」

青山 「いいよ。あー、……火野……新しい

お父さんはどうだ？」

春馬 「まだ慣れてない」

青山 「そうか」

春馬 「でも大吾さんも、慣れてなかったし」

ライオンの方へ走っていく。

遠くで見ていた薫の向かいの席に、青

山は座る。

薫 「春馬と遊ばないの？ 親権の行使が出来る日よ？」

青山 「うん。まあ、一か月分は遊んだろ」

薫 「……今季のシーズン前に、結婚式は済ませる」

青山 「おめでとう」

薫 「……」

青山 「……」

薫 「私ね、エキセントリックな人が好きなのね。あなたと高校で付き合って、結婚したのは、あなたの方が火野よりエキセントリックに見えたから」

青山 「今はむこうがそうか」

薫 「ええ。あなたは時々何を考えているか分らない。それが昔はエキセントリックに見えたけど、今は暗黒の孔を覗いているように怖い」

青山 「とくに何も考えていないよ。……黒

猫みたいなものさ」

薫 「猫は嫌い」

遠くで春馬が手を振る。

薫と青山、手を振り返す。

薫、時計を見て。

薫 「もうすぐ迎えに来るけど……会って

おく？」

青山 「？」

薫 「火野に」

○同、駐車場

赤いポルシェで迎えに来ている火野。

火野 「よう」

青山 「……」

いきなり火野の太腿をさわる。その筋肉量を確かめるように。

火野 「なんだよ」

青山 「世界一のパワージャンパーになるには、ここまで鍛えるのか」

火野 「なに？ 離婚とか再婚とか、親権の話じゃないの？」

青山 「俺、フリーガーからパワージャンパーに転向しようと思ってるさ」

火野 「は？ 風に乗るのが得意なお前が？」

青山 「それが風を怖がってるんだ。風をぶち抜くスタイルになるしかねえだろ」

火野 「お前。まだ続けんのか」

青山 「勿論」

火野 「じゃ触るな」

青山 「……」

火野 「これは俺の秘密だ」

青山、離れる。深く一礼。

青山 「そうだな。俺が甘えてた。非礼を詫びる」

去ってゆく青山。

火野 「久し振りに親友と再会して、話すことこそがそれ？」

青山 「いや。……6年分は話したよ」

去ってゆく青山の背中。

火野、思わず薫の肩を抱き寄せる。

○土手、秋から冬へ

土手でひたすらバーベルスクワットを続ける青山。

雪が降って来る。

周囲は1カットで秋から冬の雪景色に変わっていく。青山の周りだけ雪が積もらず、汗がぼたぼた落ちていく。吐く白い息も、大きくなってゆく。

T
「冬」

○カメラの映像、滑り台の公園、雪一面

千佳 「やって参りました！ 私たちの季節ジャンプの季節！ イヤッホゥー！」
と公園の滑り台から両足で滑って、スキージャンプのように飛び、着地。しかし転んで大爆笑。

○夜、千佳の部屋

で、それを編集している千佳。

青山 「何これ？ ユーチューバー？」

千佳 「雪が今見れるのは北海道だけなので、意外と伸びてる。ブログのアクセス数は落ちていないし、それだけ、あなたを待つてる人がいる」

青山 「取材はどう？」

千佳 「北海道の不動産屋をぜんぶ回るのは、さすがに骨が折れる」

青山 「全部回ったの？」

千佳 「(首を振る) いよいよこのチャンネルで、情報提供を募るかなー」

○天気が悪く、吹雪が来そうな日

○千佳の部屋

いつものようにドアが開いてて、ノックして入る青山。

青山 「いないか」

ノートPCにはユーチューブの画面が立ち上がっている。
「ライブ」の文字があり、画面の中に

は、雪の公園の中の千佳が。

千佳 「ハイ！ 『ジャンプ台は下を向いている』のライブ放送始めました！ さて今日は！ ヒルサイズ3mの手作りジャンプ台！ テッテレー！」

雪でつくった小さなジャンプ台が。

千佳 「今から飛びます！ 面白いと思った人、実は聞きたいことがあるんです！

『あおぞら牛乳の土地買収の件』で変なことを聞いてないですか！ 情報収集中です！ 私こう見えてもジャーナリストなので！

その取材のためにここに来たので！ いやあ飛びます！ ぎゃあーっ！」

直滑降、飛ぶが大転倒。

表情が柔らかなる青山。

と、机のそばの鞆が開いてて、中のもこの（この時点では観客に見せない）を、見てしまう。

青山 「……（驚く）」

窓の外の天気は怪しいことに気づく。

青山 「吹雪くぞ。こんな日に外にいたら……

あ、そんなの道民じゃないと気づかぬえか」

慌てて部屋を出る青山。

○ホワイトアウトしてゆく視界

○吹雪の公園

風が強く、視界はほとんど白。

車から降りて叫ぶ青山。

青山 「オイ！ 千佳！ 千佳！」

スマホを確認する。

「ライブ」のままの画面は真っ白。

青山 「ヤバイ。遭難するぞこれ」

白い嵐の中へ歩き出す青山。

青山 「千佳！ 千佳！」

白い視界の中に、雪でつくった小さなジャンプ台がうっすらと見える。

青山 「千佳！」

ジャンプ台の反対側に、風をよけるように千佳が倒れている。

青山 「オイ！」

走り寄る青山。抱きあげる。

千佳 「(意識を取り戻す) あれ？ 青山？」

青山 「大丈夫か！」

上着からカイロを出し、彼女の頬に当てる。

千佳 「大丈夫、そんな寒くないし」

青山 「それ、自覚症状がないってやつだ！

……失礼！」

上着の隙間から、首の後ろ、お腹と背中にカイロを突っ込む青山。

千佳 「……あ。あったかいじゃん」

青山 「お前今自分が死にかけてんの、分かってんのか？」

千佳 「……カメラ」

雪に埋もれつつあるカメラ。

千佳 「カメラ冷たくてさー。指の感覚なくなっちゃって」

青山、慌てて手袋の上から、千佳の指を一本一本ぎゅっと握って確認。

青山 「これは？ これは？ これは？」

千佳 「？ 今の、感覚ない」

千佳の手袋を取る青山。カイロを握らせる。しかし握力がないのかポトリと落ちる。

千佳の指を口に含んで温める。

千佳 「あ……熱い。あったかい」

次々に口に含む。薬指、小指。

カイロを握らせて手袋をかぶせる。

青山 「立てる？」

千佳 「むり」

小さなジャンプ台が、風を遮っている。白の中には、ハザードのぼんやりした光しか見えていない。

と、突風でジャンプ台が崩れる。

大量の雪が二人に注ぐ。

青山 「クッソ！」

雪の塊をはねのける青山。

崩れた雪を使って、周囲に壁を作りはじめる。

千佳 「？」

青山 「カマクラをつくるんだ。吹雪がやむまで、生き延びるぞ」

壁のような、カマクラのようなもの。

千佳を風から守って抱きしめる。

服の上から全身をこする。

轟音とともに突風が天井を崩す。

青山 「クッソ！」

千佳を庇う青山。

顔面に、右から突風を浴びる形に。

青山 「……！」

千佳 「私たち、死ぬ？」

青山 「死ぬかよ！ 札幌市内だぞ？ この程度の風で！ この程度の吹雪で！ もっと吹いてみるよ！ もっと横風を浴びせろよ！」

横風に立ち向かう青山。

千佳を抱きしめるように。

千佳 「ウイスキー持った救助犬、来ないかなあ」

青山 「じゃあ、恥ずかしい話してやるよ！」

千佳 「？」

青山 「鞆開いてたから、偶然見ちゃった！クラッカーと、台本が入ってた！」

× × ×

初めて出会ったとき。クラッカーを鳴らした瞬間。

鞆の中のクラッカーたち。

セリフがメモしてある。

「おめでとう青山大吾！ あなたは私に取材されるチャンスを得ました！」

× × ×

青山 「俺、君は図々しくて強引な女だと思ってた」

千佳 「……」

青山 「あのキヤラ、つくってたんだな！」

千佳 「……（顔が真っ赤に）」

青山 「ウイスキーになったか！」

千佳 「むかつく。ほんとむかつく」
青山 「血が循環すりゃなんでもいい。助か
ってからケンカしよう！」

強い横風。

青山 「ちくしょう！ ブリザードでもなん
でも来い！ 風！ 風！ 風！」

横風を受け続ける青山。

抱き合う二人。

○青山の車の中

窓が雪に埋もれていて、外が見えない。
がちやりとドアが開く。

雪が落ちる。外は太陽と青空。

千佳、乗り込む。

青山も乗り込む。

青山の顔半面に雪が凍り付いている。

千佳は笑ってルームミラーを示す。

青山、それに気づいて、雪を張り飛ば
す。二人、大笑い。

○体育館

サーキュレーター10台の風を浴びる
青山。

久我原 「どう？」

青山 「吹雪よりぬるい」

二人、拳を合わせる。

× × ×

立ち高跳び測定用の黒板に、チョーク
でスケジュールを書く久我原。

左の列に、青山のこれからのスケジュ
ール。右の列に火野のもの。

左は一番上に「W杯 大倉山」。

その下に「HTV杯、STV杯 大倉
山」「全道ノルディック 下川」「ピヤ

シリ 名寄」……と国内の予定。

右の列は、USA、GER、POL、
AUT……など外国名ばかり。

久我原 「冬季スキージャンプのワールドカッ

プは、北欧を中心に9か国23か所を回る。火野はワールドチャンピオンとして今年も全試合出る。だが大吾にその出場権はない」

青山 「金がなくて外国行けねえし」

久我原 「出場ポイントもってねえからだろ！（スケジュールを見て）大倉山で行われるワールドカップ札幌ラウンドも、火野は帰国して出場する。ヤツと試合できるのは、今季こしかねえ。そこで俺が天才的な計画を立てた。国内大会のHTV杯とSTV杯はコンチネンタルカップ。ここで5位以内に入れば、ワールドカップに出られる」

千佳 「5位？ 厳しすぎる！」

青山 「脅すなよ。開催国枠で13位までOKだろ」

久我原 「ちつ。ハツパかけようと思っただけだよ」

久我原、大倉山から下川、名寄に線を引き。

久我原 「前哨戦の名寄、下川、HBC杯に出て調子整えるぞ。幸い全部北海道だ。車で行ける」

青山 「下川とか夏でも4時間半かかるぞ」

久我原 「俺が運転するわ」

千佳 「私も代わります」

久我原 「大倉山に向けて、パワージャンプス・タイルを完成させるぞ」

青山 「……もうできてる」

久我原 「は？」

青山、その黒板に走り跳躍、一番上の「大倉山」を消すほど届く。

久我原 「……」

青山 「(にやりと笑う)」

○北海道、名寄ピヤシリシヤンツェ

T 「北海道名寄 ピヤシリジャンプ大会
ヒルサイズ110m」
で飛ぶ青山。

○北海道、下川シャンツェ

T 「北海道下川 全道ノルディック大会
ヒルサイズ68m」
で飛ぶ青山。

○大倉山ジャンプ競技場

T 「北海道札幌 大倉山ジャンプ競技場
HBC杯 ヒルサイズ137m」
で飛ぶ青山。

アナウンサー「青山大吾！ 6年間の沈黙を
破り、劇的な復活を遂げました！ 暫定3
位！ 現役ジャンパーと競います！」

解説 「青山、飛行曲線が変わりましたね。
以前のフリーガースタイルから、まるで王
者火野選手のような、火が出るようなパワ
ージャンプに変えてきました」

アナウンサー「スタイルチェンジは珍しいで
すね。新生青山といった所でしょうか！」
ジャンプを終えた青山に駆け寄る千佳。
動画カメラを向ける。

千佳 「3位おめでとう！」

青山 「……俺より飛ぶ奴が、あと2人いる
だど？」

この発言が、ユーチューブで拡散され
る。

○そのユーチューブ画面

○夜、千佳の部屋

再生数をチェックする。すでに10万
再生を越えた。

ブログにメールが届いているのに気づ
く。

「匿名の内部通報者」とある。アドレ
スはランダム文字の捨てアカのようだ。

千佳 「(文面を読む) あおぞら牛乳の不正
記録、取引不動産屋の記録を送ります。ブ

ログや配信で公にすべき内容です」
慌てて開いて内容を確認。

○同、リビング

ドタドタと階段を下りてくる千佳。

千佳 「あ……！ あ……！ あ……！」

青山 「何だよ、落ち着けよ」

千佳 「あ……あ……あ……（深呼吸）……
来た」

青山 「何が？」

千佳 「不正の証拠！ 内部通報者がガチで
来た！ いろいろやったことが、ついに
実ったの！」

青山 「落ち着け。偽物かもよ」

千佳 「これから確認する。もし本物なら……
……」

青山 「俺が火野に勝つ瞬間が、一番みんな
が注目するな。そこで公開か」

千佳 「まさに。ていうか、勝つつもりね？」

青山 「当然」

千佳 「……」

青山 「一人じゃ多分まだ風が怖かった。き
みを風から守って、初めて怖くなくなった」

千佳、うなづいてノートPCを見せる。

千佳 「10万字でも100万字でも書いて
やる。今度は私が闘う番」

階段を上がってゆく。

青山 「千佳」

千佳 「なに？」

青山 「……がんばれ」

千佳 「ありがとう」

青山 「そのスクープを書いたら……東京に
戻る？」

千佳 「……それまでの契約だし」

無言で階段を上る千佳。

無言で彼女の背中を見る青山。

○同、千佳の部屋

千佳 パタンと扉を閉める千佳。
「……」

机に向かい、記事を書き始める。

○大倉山ジャンプ競技場

T 「H T V杯コンチネンタルカップ（1
3位以内でワールドカップ出場）」

T 「予選」

青山の主観カメラ。

千佳 「ハッ！」

そのタイミングで飛ぶ。着地。

青山 「行ったでしょ！ 13位以内！」

スコアボードは10位。

千佳 『俺より飛ぶ奴』が、まだ9人

青山 「分厚いな」

千佳 「決勝でブチ抜け！」

× × ×

T 「決勝、一本目」

青山主観カメラ。

T 「決勝、二本目」

青山主観カメラ。

スコアボード「5位 青山大吾」

久我原がコーチボックスから走ってくる。バンと肩をたたく。

青山、久我原と千佳の肩をバンと張る。

3人 「つしゃー！」

拳を突き上げる。

○夜、スポーツバー

アメリカ、レイクプラシッドの大会を見る三人。千佳はノートPCを持ち込んで記事を書いている。

テレビでは火野が豪快に飛び、着地。

アナウンサー「火野、豪快に飛びます！ 他の追従を許さない、力強いサツツ！ 世界の踏切と言ってもよいでしょう！」

リプレイ。

青山 「久我原。……ひとつ、提案がある」

久我原「沖繩の海の家バイトの件？ 多分雇えるよ。それで生活費にはなるだろ？」

千佳「沖繩？」

青山「あおぞらスイミングスクール、辞めたんで」

千佳「えっ、何それ。聞いてないし」

青山「本格的にやるにはどうせいられないだろ。いやそのことじゃねえよ大事なことは」

青山、カクテルのマドラーで示す。

青山「これが元の俺の軌道（低い）、これがパワージャンプ（高い）。俺たちはこれを目指して来た。だが半年ごときの筋トレじゃあいつの脚力に勝てるわけねえ」

久我原「残念だが、同感だ」

青山「だからここ（中間の角度）を狙う。」

青山大吾第三形態、つて所だ」

久我原「半年間の筋トレは無駄じゃなかったぞ。ぶれにくい体幹は出来上がった。けどそんな急に調整できんのか？」

青山「一週間ある。大倉山なのがラッキーだ。俺のホームみたいなもんだし」

久我原「……」

青山「ホームで事故って、ホームで立ち直る。千佳と久我原とで作ってきた、第三の俺が」

久我原「コーチとしては反対だ」

青山「……」

久我原「でも男としては、叶えて欲しい」

○雪の降る札幌市街

長い横断歩道を渡る青山。

その大通りは一直線に伸びて、街の端の大倉山につき当たる。

その中腹に見えるジャンプ台。

立ち止まり、赤信号になるまで見ている青山。

○大倉山ジャンプ競技場

T 「FISスキージャンプワールドカップ第14R 札幌大倉山大会」

観客席の熱。

会場入りする青山、久我原、千佳。

青山 「久我原。今日のワックスは6番だと
思う」

久我原 「7番じゃない？」

青山 「思ったほど気温上がらないだろ。6
番で十分」

千佳 「ワックスでそんなに変わるもの？」

青山 「変わるよ。足一個分くらいは変わる」

千佳 「じゃあめちやくちや違うじゃん」

青山 「高梨沙羅は、アプローチの時に板を
絶対横に当てないんだって」

千佳 「何で？ ……あ、摩擦があるから？

……つてそんなこと出来るの？ あの台、
100メートル以上あるんでしょ？」

久我原 「それが出来るから一流。こないだは
何回当てた？」

青山 「右3回、左4回」

久我原 「じゃあ6番に変えるか」

千佳 「あれ？ 火野さんは来ないの？」

久我原 「チャンピオンは予選免除。会うのは
明日だな」

× × ×
T 「予選(50名から30名に絞られる)」

次々に飛ぶジャンパー達。

スタートバーの青山。

青山 「(深呼吸)」

それを地上のカメラで狙う千佳。

コーチボックスの久我原。

青山と千佳の呼吸がシンクロしてくる。

主観カメラ。

滑降。近づく踏切台。

青山、千佳 「ハッ！」

踏切り、空中姿勢をつくる。

低く出た。滑空は長い。

K点手前で着地。

久我原、走ってくる。もう少し高く、

を手で示す。青山、手の角度で答える。
スコアボード、青山11位。

○翌日、決勝

T 「翌日、決勝戦一本目」

行く手に、火野チームがいる。

青山、久我原、千佳。

振り返る火野は手ぶら。

一方青山は板を右肩に担いでいる。

火野 「仕上げてきたか」

青山 「十分」

火野 「板を持たないほうがいいぞ。左右が偏る」

青山 「昔からこのスタイルでね」

火野チームはたくさんの板をスタッフ達が持っている。

千佳 「2回しか飛ばないのにあんな板いるの？」

久我原 「全部ワックス違いになってて、状況に応じて変えられるんだよ」

千佳 「こっちは？」

久我原 「拭いて塗りなおす」

千佳 「原始的」

青山 「その為に金がいる。自分で持たないことも含めてね」

久我原 「俺が持つよ。調子いいんだろ？」

青山 「何でわかる？」

久我原 「お前は憎たらしい時のほうが飛ぶ」

青山 「いつもじゃねえか」

○控室

外国人選手がストレッチしたり音楽を聴いて集中している。

青山は自分でワックスを塗っている。

ずらりと並べられた板。

自分で塗っている選手は一人もいない。

○ジャンプ台

T 「一本目」

青山、スタートバーの上で深呼吸。
グリーンランプがつく。
コーチボックスの久我原、ゴーサイン。
青山、遠くを見る。山。札幌市内。
鳥が向かい風に乗っている。
カウント5、4、3、2……
吹き流しが急に逆風に。

青山

「来た」

主観カメラ。

テイクオフ、逆風に乗り、伸びる。

K点ごえ。

千佳

「来た！」

青山、ガッツポーズ。

スコアボードは1位。

駆け寄る千佳。うなづく青山。

× × ×

火野の高いジャンプ。

同じ位置に豪快な着地。

スコアボード「1位青山 2位火野」

○控室

のテレビで見ている青山と久我原。

二人ガッツポーズ。

久我原 「さっきの、完全にお前の得意パターンだったな！」

青山 「次もいい風とは限らねえ」

久我原 「その時は第三形態か」

青山 「(うなづく)……この待ち時間嫌い。
しょんべん行ってくるわ」

○トイレ

で、かつての上司、三上とすれ違う。

青山 「あれ？」

三上、ダッシュして逃げる。

○控室

久我原 「お前6番で行くって言ってなかった？」

青山 「うん。このままでと」

板をさわる久我原。

久我原 「厚めに塗った？ 12番くらいじゃね？」

青山 「は？」

手袋を取り、直接さわる。鼻で嗅ぐ。

青山 「お前がやったの？」

久我原 「お前がやったの？」

青山 「……あ」

○競技場の裏

逃げる三上、追う青山。

胴タツクルで捕まえた。

青山 「なんでワックス勝手に塗ったんですか！ 誰かに頼まれたんですか！」

三上 「私一人の判断だ……あおぞらスイミングスクールは今度潰れるんだ。私は本社に戻れないかもしれない……私も家族がいて……」

青山 「じゃあその家族に、ポケットの中見せられんのかよ！」

三上、ポケットを抑える。

青山、無理やりにポケットから12番のワックスを出す。

三上 「あ……あ……」

青山、立ち上がりワックスを森に投げる。

三上 「えっ」

青山 「俺の集中を、これ以上乱すな！」

三上 「……」

去ってゆく青山。

○競技場の裏手、階段

火野と偶然会う。

火野 「よう」

青山 「……おう」
火野 「風がラッキーだったな」
青山 「まあな。横風なら振り切ってパワージャンプ、いい風が来ればフリーガー。使い分けられるようになってきた」
火野 「厄介な戦法使うようになったなあ。これが格闘技だったら、って思うぜ。直接殴り合えればいいのに」
青山 「今ここでやるか？（拳を握る）」
火野 「（構える）ある」
二人で笑って控室へ向かう。
火野 「内部告発者のメール、届いた？」
青山 「え？ アレお前だったの？」
火野 「社内の詳しい奴に手回した。まあ大企業だったって一枚岩じゃねえってことさ。スポンサー契約で薫と春馬は食わせられるし。あ、スイミングスクールつぶれるんだって？」
青山 「沖縄で働き口見つけた」
火野 「久我原サンどこ？」
青山 「うん」
火野 「……」
青山 「……」
二人、無言で階段をのぼりながら。
火野 「正直、お前がまた落ちればいいのに、って思ってる」
青山 「俺も、お前が落ちてみるよ、って思ってる」
火野 「言うね」
青山 「お前もな」
不敵な笑みを浮かべ、二人は階段を上ってゆく。

○控室

ワックスを塗りながら、青山と久我原はテレビ中継を見ている。
火野、大ジャンプ。
アナウンサー「来ました！ K点ごえ！」
スコアに「130m to beat」と出る。

久我原 「130メートル飛んだら勝ち。行けるか？」

青山 「最高の舞台」

○同、決勝

マスコミ席でカメラを構える千佳。

青山がスタートバーに乗った。

カメラのファインダーの中。

青山、こちらに向かって手を挙げる。

千佳 「えっ」

思わずファインダーから目を外し、肉

眼で見る千佳。でも遠すぎる。

もう一度ファインダーで見る。

たしかに手を振っている。

千佳 「嘘でしょ。見えてるの？」

それをコーチボックスから見ると久我原。

久我原 「アイツ調子いいって言ったの本当

なんだな。『調子いい時は遠くまで見える』

って。イイ女がいるかどうか、観客席まで

見えるってな」

青山と千佳を見て笑う久我原。

久我原 「やっつねえって言ったくせに」

深呼吸して構える青山。

水の中にいる。

その横に、カメラを構える千佳がいる。

その水は、青山の皮膚に触れた所から

沸騰を始める。

千佳の周囲の水も沸騰を始める。

× × ×

回想。千佳、クラッカーを鳴らす。

予備のクラッカーと台本。

千佳 「おめでとう青山大吾！ あなたは私

に取材されるチャンスを得ました！」

吹雪の中抱き合う二人。

公園の滑り台。

千佳 「ねえ。人生は一回失敗したら、終わ

り？」

× × ×

青山 「まだ、つづきがある」

シグナルグリーン。
ゴーサインを出す久我原。
主観カメラ。加速してゆく直滑降。
まっすぐ、脇に当たらないスキー板。
迫るジャンプ台。

眼下に広がる札幌市。

青山と千佳「ハッ！」

低い角度で飛び出し、風に乗る。

横風で流されるが、気にせずK点越え。

アナウンサー「K点越え！ 134メートル

ル！ 青山大吾、世界一の大舞台、ワール

ドカップでの優勝復活劇！」

沸騰する観客。

青山、メットを外す。

観客席から飛び出して来た千佳。

青山、手袋を脱ぎ捨てる。

千佳の頬に手を当てる。

千佳、その手を握りしめる。

千佳 「熱い！ 熱い！」

千佳、思わず青山を抱きしめる。

青山 「ねえ、キスしていい？」

千佳 「は？」

青山 「こういう時は幸せなキスをして終了

でしょ」

千佳 「まだ付き合うつて決めてないんです

けど」

青山 「優勝したのにな？ 千佳さんのおかげ

なのに？」

千佳 「じゃあちゃんと告白して。ジャンプ

ーらしく」

青山 「えっ？」

千佳 「ジャンパーらしく！」

青山 「えっと……俺のジャンプ台になって

ください」

千佳 「踏み台かよ！ 私下向きかよ！」

青山 「あー、時速90キロであなたに会い

に行きます」

千佳 「いまいち！」

青山 「……あ」

千佳 「何？」

青山 「今日が終わっても、東京へ帰らないで。俺、まだ君といたい」

千佳 「あ……はい」

青山 「あ、ジャンパーぼくなかった」

千佳 「青山大吾らしかったから……はい」

二人はやさしくキスをする。

千佳はスマホを取り出す。

ブログ編集画面。「記事投稿」ボタンを押す。

青山 「あーあ、世間は大騒ぎだな」

千佳 「まだ追及するべきことはある。北海道に残るかなー頼まれちゃったしなー」

微笑む二人。

火野、声をかける。

火野 「青山！ 俺このあとフィンランドなんだけど、お前も来いよ！」

青山 「そんな金ねえよ」

火野 「じゃそのあと日本戻って来るから、伊藤杯でもう一回やろうぜ！ 次あんなイイ風吹かねえだろ。大自然相手なんだから、何回もやって平均で勝負だろ！」

青山 「しつこいな、だから雪国の男は」

火野 「長く続く情熱、と言ってくれ」

青山 「ははは。……また、やろう」

拳を打ち合わせる二人。

走って来る久我原。

久我原 「表彰式だぞ！ 大吾！」

用意されている表彰台。

拍手する久我原、火野、千佳。

拍手する観客席の薫、春馬。

表彰台に上る青山。

それを見守るジャンプ台。

青山NA 「スキージャンプの台は下を向いている。そのまま落ちれば下に落ちるものを、上に飛びたい奴だけが上に飛ぶ。人生と同じだと、俺は思う」

(了)

【参考資料】

(YouTube: 主観カメラやドローンショット、サマージャンプの様子)

- GoPro_ Ski Flying With Anders Jacobsen
- GoPro Ski Jumping in Lake Placid, NY, USA
- 【限界突破】小林陵侑 291 m 飛んだ！スキージャンプ世界記録を更新！様々な角度から見せます
- へ音風景へ飛行少年 未来へ踏み切れ 札幌市荒井山ジャンツェ

(サイト、書籍)

- ジャンプ雪印メグミルク meg-snow.com
- 公益社団法人全日本スキー連盟 (公式試合スケジュール) Ski-japan.or.jp
- 個人ブログ sora色ジャンプ (国内大会リストや雑感など)、遷移点(スキージャンプ台とジャンパーの相性についての考察)
- 5ちゃんねる スキージャンプ元日本代表 だけど質問ある？#1, #2

『イップスの乗り越え方』 河野昭典、飯島智則 BABジャパン

(ドキュメンタリー)

・「バッケンレコードを越えて」北海道文化放送